中野重治「模型境界標」論——「朝鮮人の転向」をめぐって

廣瀬 陽一

1. はじめに

中野重治の「模型境界標」(『小説新潮』1961年9月)は、杉本良吉と岡田嘉子のソ連亡命(1937年末−38年初)を素材にした短編だが、作中に唐突とも思える場面が挿入されている。中野・原泉夫妻をモデルにした片口・谷夫妻の家の近所にある朝鮮人集落で祭が行われていたところ、真夜中に騒ぎが起こり、数人が彼らの家の前を駆けぬけざまに板塀を叩きつけて何かを怒鳴るが、片口がその声の中に、「朝鮮人に転向はないぞ……」という言葉を聞くというものである。

> 女房は木の寝台に寝ていましたが、私はそのころ背なかが痛くて畳に寝ていました。とろとろつとしかけたときだつたと思います。三−四人の人間が、ふたりくらいだつたかも知れません、少し離れた地点からどどつと音を立てて駆けてきて、私の家の前を駆けぬけざま板塀を叩きつけて何かどなりました。そしてたちまち谷地(たにち)の方へ駆けおりて行きました。私の家の前で停止しなかつた。走りながらです。あつという間(ま)でしたが、あたりがしんとしていますからそれは騒ぎでした。そして私は、はね起きようとしかけた瞬間からだを縮めて床のなかへもぐつていました。女房からも身をそむけていました。彼女にしても、はね起きようとしかけたのだつたらしいのですがその後はわかりません。何といつてどなつたのか確かにはわからなかつたのですが、「朝鮮人に転向はないぞ……」、とにかくそんなことだつたことは確かです[1]。

物語はこの後すぐ、「「転向」といえば、それは女房にも無関係に私にだけ関係していたのです」と、片口自身の転向や獄中で谷が行ったハンストの話題に移っていく。そして以降、朝鮮人集落に何が起こったのかや、「朝鮮人に転向はないぞ……」の怒鳴り声に話題が戻らないまま物語は終わる。

中野は数多くの小説やエッセイなどで転向に言及しているが、朝鮮人の転向に触れたのはこの箇所が唯一である。ところが、中野にとって転向や朝鮮の問題がどれほどの重要性を有しているのかは広く認識されているにもかかわらず、中野研究の中でこの箇所に言及したものとしては、円谷真護の評論がある程度である。円谷は、1960−70年代に中野が熱心に朝鮮問題に取り組んだことを彼の誠実さのあらわれと評し、その誠実さを持続させ得た根底に「朝鮮人に転向はないぞ……」に対する責任感があったと語った。しかし中野は、自分は転向したが朝鮮人は転向しなかったという単純な対比による負い目だけでこの

1
中野重治「模型境界標」(『小説新潮』1961年9月、新潮社)。引用は『定本版中野重治全集4』66頁。以下、中野の文章は定本版全集(全29巻。1996−98年、筑摩書房)より引用。ルビは原文ママ、以下同様。

一言を受け止めていたわけではないと、次のように主張した。

> 朝鮮人のなかには、個人として転向した人はあった。しかし、朝鮮の大日本帝国からの独立闘争、朝鮮人の民族解放運動はつづいた。止むことはなかった。したがって、「朝鮮人に転向はない」、なかった。そこが日本人と決定的に異なる。もちろん、個人として非転向を貫き、死んだり殺されたりした人は日本人にもいた。しかし、日本人が非転向という言葉でまっ先に思い浮かべるイメージは〈獄中一八年〉であるに違いない。それは、運動の不在と表裏の個人の努力である。したがって個人の名誉を結果するのみである。しかし間島パルチザンの形をふくむ朝鮮の非転向は、何よりも運動を持続させることである。そうして、闘争を勝利へみちびく。運動家にとっては、運動の持続こそが生命である。運動が壊滅すれば、個人の名誉もへちまもない。運動家としては、そう言わねばならぬ。しかし、日本ではどうだったか[2]。

2
円谷真護『中野重治――ある昭和の軌跡』(1990年7月、社会評論社)240頁。

「模型境界標」の発表から3年後の1964年9月に開かれた日本共産党第11回中央委員会総会で、中野は神山茂夫とともに党を除名された。その後、11月の党第9回大会で、「志賀義雄、鈴木市蔵、神山茂夫、中野重治の除名処分承認に関する決議」が議決された[3]。これに対して4名は12月、「日本共産党(日本のこえ)に結集しよう!」と訴え、独自に政治活動を展開した。これと並行して中野は65年1月から『群像』に「甲乙丙丁」の連載を始めた。中野と神山は67年10月、「日本共産党(日本のこえ)」と断絶するが、60年代中盤に起こったこれらの展開を知っている者は、「朝鮮人に転向はないぞ……」に〈獄中一八年〉への批判を読み込みたくなるかもしれない。実際、中野が「転向」の語を、日本の共産主義運動との関連なしに用いたとは考えられない。

3
4名の除名の経緯については、小山弘健『戦後日本共産党史』(1966年11月、芳賀書店)342〜370頁を参照。

しかし竹内栄美子や松下裕が指摘したように、この小説を執筆した直後の7月25−31日に開かれた党の第8回大会頃まで、中野と党の関係はそれなりに安定しており、1958年に開かれた第7回大会で書記長に選ばれて以後、〈獄中一八年〉の象徴的存在となった宮本顕治との関係も、決して悪くなかった[4]。実際、この時期までの中野の文章には、〈獄中一八年〉への個人的批判よりも、党が過去に犯した誤りやセクト主義的傾向を、中野を含む党員がどう自覚的に受け止めて克服していくかという自己批判的な色合いの強いものが多い。また、朝鮮人の転向に関する研究が、未だ日本国内で行われていない中で、中野が朝鮮人の転向についてどの程度の認識を持っていたか、持ち得る状況にあったかを考察せずに両者を自明のように対置させることは、大きな問題があるのではないか。

4
竹内栄美子『戦後日本、中野重治という良心』(2009年10月、平凡社新書)170−171頁。松下裕『増訂 評伝中野重治』(2011年5月、平凡社ライブラリー)514−516頁。

本論では以上の疑問を踏まえ、まず物語の主たる話題である高木の亡命と模型境界標に焦点を当て、作中における「朝鮮人に転向はないぞ……」の位置づけを明確化する。その上で、朝鮮問題に対する中野の認識という文脈の中で、「朝鮮人に転向はないぞ……」の発想の源泉となったものを探る。これを通じて、

この文言から垣間見えてくる、中野と（在日）朝鮮人との知的交流を浮き彫りにしたい。

2.〈越境〉と「模型」の境界標

「模型境界標」は、片口が転向してまもない1935年頃の年末から物語が始まる[5]。「仕事具合がわるくなつて、やきもきしても稼げない、外にむかつて、また外で、かけずりまわることができ」ず、「私は文学の仕事、女房は芝居の仕事をしていましたが、何もかも思うように運」ばない状況の中、二人は頻繁に夫婦喧嘩をしていた。そんなある日、谷と同じ劇団にいる高木英吉が珍しく彼らの家にやって来た。片口は、高木が、「私たちが喧嘩をして、挙句に夫婦わかれでもしやしまいかと思つて忠告しにやつてきたらしい」と推察するが、彼には「私たちに夫婦喧嘩のことで忠告することはできない」と思う。片口と谷は結婚して6, 7年になるのに対し、高木は4年ほど前に砧よしえと両思いになったが、高木は34年頃まで3年ほど未決におり、砧は結核が悪化したため、「許嫁状態のままで結婚にはいれ」ず未婚だったからだ。「高木は、それらしいことを口には出」さず、「「えへへへ……」といつた言葉で、半分てれた言い方で何かを言つて帰つ」た。それから5, 6日後の真夜中、近所の朝鮮人集落で何か騒ぎが起こり、片口は「朝鮮人に転向はないぞ……」の声を耳にする。その直後、Y新聞社の社会部記者が谷に会いに来る。記者は片口と谷に、高木が「俳優の加納なお子を連れて五十度線〔樺太の日ソ国境〕を突破した[6]」ことや越境時の状況を説明し、谷に話を聞いて帰ったが、翌日のY新聞に谷の談話は出なかった。

戦争の拡大に伴って社会状勢の変化の度合いが加速し、高木のことは話題にのぼらなくなった。執筆を禁止された片口は、東京市社会局の外局で臨時雇いの職に就いて、分室で翻訳を行うが、ある日の昼休みに部屋を出た際、河野通勢という画家と同姓同名で漢字も同じ人物を見かけた。片口が話しかけると、河野は、自分は画家ではないと即座に否定したが、これをきっかけに、二人はときどき話をするようになった。そしてある日、片口は河野に誘われて、他の数名と一緒に、外苑にある樺太の国境標の模型を見に行った[7]。河野は「ほれ、越境だぞ……」と言ってまたぎ、他の人もまねをするが、片口は、「だれに遠慮するということもありませんがその遊びはしませんでした」。

その後、片口は模型境界標のことを忘れていたが、1961年6月下旬−7月上旬頃[8]に思い出し、慶応病院の真向かいに移されたそれを見に行った。片口はその時に初めて、模型境界標の裏側に回り、そこに刻まれた双頭の鷲やロシア語を目にした。

以上から窺えるように、この小説では、高木の命がけの亡命が、境界標の「模型」を「遊び」で跨ぐ河野たちの行為と大差ないものであるように戯画化されている。さらに物語の最後で模型境界標の裏側に回る片口が描かれ、「遊び」でも

5
以下、粗筋中の引用は「模型境界標」『全集4』からのため、頁数は省略する。

6
〔 〕内は論者の補足、以下同様。

7
中野が河野らと模型境界標を見に行ったエピソードの事実については、中野重治「わが生涯と文学　曖昧なところのある一つの変化」（『中野重治全集2』1977年4月、筑摩書房）。『全集28』204−205頁を参照。

8
作中に、「このあいだ亡くなつた青野季吉」と記されている（「模型境界標」前掲、『全集4』72頁）。青野の没年月日が1961年6月23日であること、「模型境界標」の執筆日が7月10日であることから、時期を推定。

跨がなかった彼の中にあった〈越境〉に対する意識が、いつの間にか消えてしまっていたことが示される。それはかつて中野が杉本の亡命に抱いていた認識に、何らかの変化が生じたことを意味している。

例えば平野謙は「ひとつの反措定」(1946年)で、「杉本良吉がいかに悲壮な理想を抱いていたにせよ、その理想実現のためになまみの一女性を踏み台にしたという一点において、その高遠なるべき理想全体が、きびしい批判にさらされねばなるまい」と述べ、「マルクス主義文学運動の功罪、それが転向を結果せざるを得なかった道ゆき、それらの複雑な内外の事情をひとつの必然的偏向として運動の内部から剔抉する」ためには、「「越境事件」などに典型的にあらわれた偏向と誤謬とを」「率直に自己批判する精神が必要だろう」と主張した[9]。これに対して中野は「批評の人間性」(1946年)で、「平野には政治を人間的に考える能力がない」と痛烈に断罪した[10]。杉本と岡田が日本国内におらず弁明もできない状況の中、二人が亡命に至るまでの心理を勝手に推測し、頭から岡田を犠牲者と決めつけて杉本の道義的責任を追及しているからだ。中野の考えでは、「越境事件」にあらわれた問題の本質は、二人を亡命まで追いやった日本帝国主義の権力構造にある。その構造の解明なしに個人の責任を問うことは、転向者を倫理的に追究したのと同様、「最も悪質な戦争責任者をもともと良心のなかつたものとして追及から自由にし、弱点を持ちつつそれぞれに戦つた作家たちを無限に倫理的に責める[11]」結果しかもたらさない。

こうして「批評の人間性」では中野は、杉本が岡田を連れて亡命したこと自体に対しては価値判断を保留し、亡命を男女関係の問題に結びつける態度を徹底的に批判した。これを念頭に置くと「模型境界標」の次の一節には見逃せないものがある。

> 〔高木の忠告に片口は〕「何をいつてやがる……」と思う一方、砧さんの病状、高木の心づかい、病状好転を辛抱して待つて結婚にはいろうとするらしい彼の態度、その彼に反射した私たちの夫婦喧嘩——それならば、柄(がら)にもない忠告に照れながらも出てきたのは大いに積極的だつたわけですから。そしてもう一度逆もどりすれば、そう思うことは思つても、ちよつとちがうなといつた気持ちにどこかに引つかかつていたのです。人にはタイプがあります。じゆんじゆんと理を説いてそれの似合う男もあれば、そんなことのできない男、すればおかしくなる男というのもあります。高木は後のほうの男で、ことに私たちとの関係ではいつそうそうでした[12]。

片口は、高校生の時に起こった有島武郎の心中事件に対し、「何かロマンチックのようなもの」を感じたが、彼の中学時代の同級生で事件の少し前に結婚した吉野は、「蛆(うじ)がわいていたなんて。醜悪だよ……」と頭から否定した。片口は、「ああいう心中が、彼らの生活にたいして腐蝕的なものに映らなかつたとしたらそのほうが不健全だつたでしよう」と、吉野の正しさを認めつつも、吉野「の否定を彼らの新婚生活の防衛のように受けとつた点があつた」。片口は、高木

9
平野謙「ひとつの反措定」(『新生活』1946年5月、新生活社)。ただし引用は平野謙『平野謙全集1』(1975年1月、新潮社)183–184頁。

10
中野重治「批評の人間性　一——平野謙・荒正人について　一」(『新日本文学』1946年7月、新日本文学会)。『全集12』93頁。

11
中野重治「批評の人間性　二——文学反動の問題など」(『新日本文学』1946年5月、新日本文学会)。『全集12』101頁。

12
「模型境界標」前掲、『全集4』64頁。

の忠告にも吉野と同様の、「彼自身の防衛戦のようなもの」を感じた。もし高木が心から砧を愛し、円満な夫婦生活を送るような男なら、頻繁に夫婦喧嘩をしている片口と谷の様子は「醜悪」に見えただろう。しかし逆に言えば片口と谷は、生活が思うようにいかず、頻繁に喧嘩をする中でも夫婦関係を維持し、離婚という最後の一線を越えずに暮らし続けている。それは些かも「醜悪」な有り様ではない。片口が高木の忠告に、「ちよつとちがうなといつた気持ちにどこかに引つかかつ」た要因はここにある。実際、高木はその後まもなく加納を連れて亡命する。それは国境を越えると同時に砧との人間的な関係も越えることだ。作中には、平野が主張したような、高木が加納を「利用」したと読みとれる描写はない。しかし片口と谷の夫婦関係との対比を通じて、高木の政治的行動とヒューマニズムとの関係が、暗黙に問い直されていることは否定できない。

新聞記者が片口と谷に高木の亡命の様子を真摯に語る場面と、河野たちが模型境界標を跨ぐ遊びをする場面との対比も、高木の決意の〈純粋さ〉に疑問を投げかけるものとなっている。

> 私は信じられぬと言いましたが、若い記者は熱心にいきさつを話します。疑(うたぐ)られたと取つたのでしょう。高木英吉が、俳優の加納(かのう)なお子を連れて五十度線を突破した。ふたりは国境監視哨の人びとを慰問にきたというふれこみで、事実監視哨の人たちに慰問の言葉をかけたりなどもして、それからそこいらを歩いてみるといつた形で境界線の方へ進んで行つた。あまりそつちへ行くものだから監視哨の人が注意をした。すると高木がピストルをかざして、おどかして、その恰好のままで一散に奥へ駆けて去つた。それはまちがいない。手まえの宿屋でのこともすつかりしらべてある。東京が空(から)なことも調べてある。あなた方の立場ということも知つています、けつして作りごとをいうのではありませんという記者の話は真摯(しんし)といつた調子でした[13]。

13
同前、『全集4』68頁。

> 「きようはいいとこへお伴しましよう。外苑へ行きましよう。樺太の国境標をお目にかけますよ。それとも、先刻御存知ですか。」
>
> 穏やかで晴れあがつた日でしたが、むろん私は知らぬと答えました。私たちは河野さんに連れられて六、七人でそこへ行きました。
>
> そしてそれはあつたのです。小学校の地理教科書で挿絵を見て以来の、あの将棋の駒形の境界標がそこに立つていました。むろん模型です。模型にしてはよく出来ていると私は思いました。
>
> 「ほれ、越境だぞ……」といつて河野さんがそこをひとまたぎします。
>
> 「よいしよ……」といつてみんながまねします。
>
> 「でも加納なお子さんがいなくて残念だな。」というものもいます。
>
> 何の屈託もありません。私にしても――しかし私は、だれに遠慮ということもありませんがその遊びはしませんでした[14]。

14
同前、『全集4』71–72頁。

片口は「遊び」でも「模型」でも境界標を跨がなかった。それは高木に対する彼なりの敬意のあらわれと言える。だが何の屈託もなく模型境界標を跨ぎ、加納がいなくて残念だと口にする河野たちの様子を描くこと自体、高木の亡命も、「模型」の境界標を「遊び」で跨ぐ、いわばメッキで塗装された英雄主義の所産ではなかったかという疑念を暗に示すものである。しかも物語の最後には、片口も模型境界標を跨いで裏側を見ることでなし崩しに河野たちと大差ない場所に立つことになる。

日本共産党は1955年の第6回全国協議会（六全協）で50年代前半の極左冒険主義路線を全面的に自己批判し、根本的な路線転換を表明した。だが中野が「六全協にふれずには第七大会に行くことができない」と強い危機感を覚えたにもかかわらず、党内には50年代前半の誤りを深く検討し、日本の共産主義運動の歴史の中に位置づけることが「さし迫つた必要事だということの認識がうすかつた、まだうすい」状況にあった[15]。その後も中野は、選挙などでは積極的に共産党を応援する一方、党の第8回大会で討議される政治報告と綱領の草案について、「第七大会以後の闘争の経験から、政治的教訓を歴史的な姿で十分明らかに引きだしてきていない。ある方式を頭のなかに設定しておいて、それを演繹（えんえき）することに力を注いでいる」などと批判し[16]、大会前は政治報告に反対、綱領は保留という立場を取った。しかし大会では「草案の線を基本的に認めえるところへきた」と表明した[17]。

ここから窺えるように、「模型境界標」が発表されたのは、大会で決議された方針やそのもとで行われた党執行部や個々の党員の活動が次の大会で総括され、その成果を土台に次の方針が決定されるという手続きが踏まれないまま、全てがなし崩しに進められる雰囲気が党内に蔓延しており、党の中央委員だった中野もその雰囲気を断ち切れずにいた時期だった。それは高木の命がけの亡命が、物語の最後に、模型境界標の裏側に回る片口の、〈越境〉の意識さえないなし崩しの〈越境〉として戯画化されるのと対応している。このなし崩しに対置されているのが、「朝鮮人に転向はないぞ……」の怒鳴り声と考えられる。だが中野はなぜここで、それまで一度も問題化したことのない朝鮮人の転向を持ちだしてきたのか。次節ではこの疑問に論点を移して考察を進めたい。

15
中野重治「そのものとしての戦い」（『前衛』1957年9月、日本共産党中央委員会。『全集14』222頁。

16
中野重治「政治報告草案について」（春日庄次郎編『社会主義への日本の道——日本共産党綱領草案にたいする意見書』1961年8月、新しい時代社）。『全集14』621頁。松下裕「解題」によれば、「もともと第八回大会の前におこなわれるべき全党的討議の資料として、党機関紙上に発表するためにそれぞれ本年五月十五日までに書かれたもの」だったが、実際には発表されなかった（『全集14』690頁）。

17
中野重治「綱領草案について——第八大会の議決権のない中央委員として」（『アカハタ』1961年7月29日、日本共産党中央委員会）。『全集14』633頁。原文は無題。

3. 朝鮮人の転向と中野重治

1933年6月、共産党最高指導者だった佐野学と鍋山貞親が連名で「共同被告同志に告ぐる書」を発表したのを皮切りに、日本人共産党員や共産主義者の間で大量転向現象が起こった。中野も34年5月、転向を表明し、「命をかけた（?）のに自ら敗れた[18]」という屈辱を味わった。ここに見られる日本の共産主義運動の脆さや、敗戦後の非転向の指導者による強力な中央集権体制がもたらした党の組織的硬直化・官僚主義化に対置される抵抗として、中野研究者の間で

18
中野重治「「文学者に就て」について」（『行動』1935年2月、紀伊国屋出版部）。『全集10』52頁。

引き合いに出されるのが、中野が「魯迅伝」(1939年)で引用した魯迅「空談」(1926年)の次の文章である。

> 改革には無論常に流血を免(まぬか)れない。だが流血は必ずしも改革に等しくはない。血の応用はちやうど金銭のやうで、吝嗇(りんしょく)ではもとよりだめだが、浪費も大きな失算である。
>
> 〔中略〕
>
> 現在のやうに多くの火器が発明された時代では、交戦には悉(ことごと)く塹壕戦を用ひる。これは決して命ををしむからではなくつて徒(いたず)らに生命を放棄したくないからだ。戦士の生命は貴重なものであるから、戦士の少いところでは、この生命は益々貴重である。貴重といふことは決して『家に珍蔵する』ことではなくて、小さい元手できはめて大きい利益を獲(か)ち得るためであり、少くとも、取引きをもともとにしなければならないからだ。河のやうな血の流れで一人の敵を溺死させ、同胞の屍(しかばね)で一つの欠陥をうづめつくすことは、もはや陳腐な話だ。最新の戦術的視角からみればこれは何と大きな損失であろう。
>
> 今回の死者の後進のものに遺し伝へた功徳は、多くの徒輩の人相を引きはいで、その思ひがけぬところにひそんでゐる陰険な邪心を暴露し、後につづく戦闘者にもつと他の方法の戦闘を教へたことである[19]。

1926年3月12日、奉天派と直隷派の連合軍と闘っていた国民軍が日本の駆逐艦を連合軍と誤って射撃を加えた。これに日本軍が応戦し、日本側に3名の重軽傷者、国民軍側に数十名の死傷者を出した。日英米仏など8ヵ国は、国民軍と奉天軍の双方に共同通告を出し、18日までに両軍とも全面的に受諾した。これに対し、18日、学生や市民など約5千名が北京の天安門前に集まってデモ行進を行い、段祺瑞政府への陳情を試みたが、衛兵に発砲され、魯迅の教え子を含む多数の死傷者が出た(3·18事件)[20]。だがその後も民衆の請願は続き、その度に犠牲者を出した。魯迅の先の文章は、自ら死地に赴く彼らを諫め、他の戦闘方法を考えるよう訴えたものである。

竹内栄美子は、中野が1957年に初めて訪中し、魯迅博物館を訪れたエピソードにからめて、中野が魯迅の先の言葉に注目したことについて次のように述べた。

> 軽々に命を落としてはいけない。改革のためには「もつと他の方法の戦闘」が必要だという魯迅の議論に中野が共感を示したのは、「転向」を経て戦時下を過ごしていた中野自身が「もつと他の方法の戦闘」が必要だと痛感していたからだったに違いない。決して生命を粗末にせず、ねばりづよく思想を持続させること、激情にかられた振る舞いよりも、むしろふてぶてしくしたたかになること。そういう態度がなぜ必要かといえば、敵はいっそうしたたかで、にこやかな笑顔でスマートな振る舞いを見せながら

19
魯迅「空談」(『大魯迅全集3』1937年3月、改造社)。ただし引用は中野重治「魯迅伝」(『文学者』1939年10月、『文学者』発行所)。『全集20』625–626頁。

20
「ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典」(https://kotobank.jp/word/三·一八事件-70319)、菊池秀明『中国の歴史10』(2005年9月、講談社)250–252頁に基づく。

暴戻の限りを尽くすのだから。「転向」後の中野が魯迅から学んだことは、このようなことだった[21]。

では「朝鮮人に転向はないぞ……」の文言も、中野が魯迅から学んだ「もつと他の方法の戦闘」を朝鮮人に適用した結果として記されたものだろうか。そう結論づけるのは早計である。1920年代半ばから共産主義（文学）運動に深く関わっていた中野には、魯迅を媒介にしなくても、朝鮮人の転向について直接に知る機会は少なくなかったからである。佐野・鍋山の声明後に大量転向が起った際、すぐに〈内地〉の朝鮮人党員や共産主義者にも転向制度が適用されたことは、それを裏付ける有力な傍証の一つである。内務省警保局によれば、1933年は「有力党員ニシテ転向ヲ声明シ過去を生産スルモノ続出スルニ不拘、鮮人党員ニシテ転向ヲ声明スル者未ダ一名モナク（共青員ニ一名アリ）[22]」という状況だったが、34年は治安維持法違反の刑余者と受刑中の朝鮮人120名中96名が当局から転向・準転向[23]と、35年は同年中に釈放された刑余者と受刑中の朝鮮人103名中88名が転向・準転向[24]と認められた。日本人より遥かに少なかったとはいえ、佐野・鍋山の転向直後から〈内地〉の朝鮮人にも転向制度が適用され、転向した朝鮮人がいたのである。その後、36年には植民地朝鮮でも「朝鮮思想犯保護観察令」が施行され、公式に転向制度が成立した。洪宗郁（ホンジョンウル）によれば、植民地朝鮮における大量転向は、37年に勃発した日中戦争の緒戦で日本が勝利して以後に起こった。「一九三八年末の調査によれば、在監思想犯一二九八名中、転向者は合わせて七七六名であったが、そのうち日中戦争の勃発後に転向を明らかにした者が四二七名であり、一年という短い期間に転向者が急速に増えたことを物語っている[25]」。こうした状況を背景に、多くの朝鮮人運動家や文学者が〈大東亜戦争〉や〈内鮮一体〉への積極的／消極的な協力を余儀なくされたり、礼賛に転じた。その中には敗戦＝〈解放〉直後の日本共産党内で理論的指導者として活動した金斗鎔（キムドゥヨン）、「雨の降る品川駅」の副題で名前を挙げられた李北満（イブンマン）と金浩永（キムホヨン）、中野の妹の鈴子と恋愛関係にあった詩人の金龍済（キムリョンジェ）、朝鮮人プロレタリア文学者の先駆的存在である張赫宙（チャンヒョクチュ）、彼らと反対に偽装転向して延安に脱出した小説家の金史良（キムサリャン）など[26]、中野が親しく交流していたり、深い付き合いはなかったとしても文学活動を通じて確実に存在を知っていた朝鮮人が含まれていた。

彼らの多くは、戦中から日本の敗戦＝〈解放〉後に朝鮮半島に帰ったり死去するなどしたため、関係が途切れたが、彼らと入れ替わるように、〈解放〉後から活動を開始した在日朝鮮人との交流が新たに始まった。その中で特に重要で、資料や証言を通じて交流関係の実態を知ることのできる数少ない在日朝鮮人が、小説家でのち古代史研究家となった金達寿（キムダルス）である。金達寿は1946年4月に創刊された雑誌『民主朝鮮』の編集長を務め、同誌の創刊号から「後衛の街」を連載した。これが新日本文学会の文学者に注目され、46年10月頃に小田切秀雄と中野重治を推薦人として入会すると、すぐに常任委員に選出された。ただし金

21
『戦後日本、中野重治という良心』前掲、199頁。

22
内務省警保局編『復刻版　社会運動の状況5　昭和八年』（1972年1月、三一書房）1477頁。

23
内務省警保局編『復刻版　社会運動の状況6　昭和九年』（1972年1月、三一書房）1503頁。

24
内務省警保局編『復刻版　社会運動の状況7　昭和十年』（1972年2月、三一書房）1512頁。

25
洪宗郁『戦時期朝鮮の転向者たち――帝国／植民地の統合と亀裂』（2011年2月、有志舎）57頁。

26
中野と〈内地〉にいた朝鮮人との交流については、水野直樹「「雨の降る品川駅」の事実しらべ」（『季刊三千里』1980年2月、三千里社）、高川まゆみ「中野重治論――朝鮮問題を中心に」（『藤女子大学国文学雑誌』1984年12月、藤女子大学・藤女子短期大学国語国文学会）、大村益夫『愛する大陸よ――詩人金竜済研究』（1992年3月、大和書房）、申銀珠「中野重治、詩的精神の憤怒の行方――〈君らの叛逆する心は別れの一瞬に凍る〉をめぐって」（『国文学　解釈と教材の研究』2002年1月、学燈社）、鄭勝云『中野重治と朝鮮』（2002年11月、新幹社）、水野直樹「中野重治と金斗鎔」（『情況』2005年10月、情況出版）などを参照。

達寿が中野との初対面は47年6月頃である。この直前、金達寿は『国際タイムス』という新聞に転載された「雨の降る品川駅」をたまたま読んで大きな感動を覚えた。その後、金達寿は50年代前半には中野宅に頻繁に出入りしたり、中野の評論集『政治と文学』を水野明善とまとめる[27]ほど親しい関係になった。中野の方も、「玄海灘」(『新日本文学』1952−53年)をはじめ金達寿の小説やエッセイを高く評価する文章を何度も発表したり、金達寿が『朝鮮』(1958年、岩波新書)に対して在日本朝鮮人総聯合会(総聯)から批判を受けていた時には、「僕を利用する必要などあつたら、遠慮なくそういつて下さい」という葉書を送る[28]など、金達寿を厚く信頼し激励した。中野が絶筆「返事、お礼、間にあわせ」(1979年6月執筆)で引用した、「ソウル」を日本帝国主義者が呼び始めた「京城」と書くのは如何なものかという読者の批判に対して金達寿に相談した[29]ことに窺えるように、二人の親密な知的交流は中野が79年8月に死ぬ直前まで変わることなく続いた。

また金達寿は「後衛の街」を皮切りに、朝鮮民族としての民族意識への自覚を主題にした小説を次々に発表したが、その中には様々な事情や思惑から日本の帝国主義戦争と植民地支配に加担したり、加担するふりをして抵抗を続ける朝鮮人が登場する。「玄海灘」を例に挙げると、主人公の一人である白省五に共産主義思想や独立運動の状況を吹き込み、白省五が運動家たちとある程度の関係を持ったところで一網打尽に検挙する特高係刑事の李承元は前者の代表、街角で「皇国臣民ノ誓詞」を教えつつ秘かに独立運動に関わる趙光瑞という奇妙な老人は後者の代表と言える。戦前戦中に少しでも政治的な活動に参加した経験のある者なら、李承元や趙光瑞の言動に転向や偽装転向を読みとることは極めて容易である。さらに金達寿自身、1942年1月から45年5月まで、神奈川新聞社と朝鮮総督府の御用新聞社である京城日報社で記者を務めた、無自覚的な戦争協力者でもあった。このため彼は、〈解放〉と同時に強烈な罪悪感に襲われ、「八・一五以後」(1947年)などいくつかの小説の中に、自らの新聞記者体験を自己批判する場面を少なからず描きだした[30]。

これら多くの傍証から、中野が朝鮮人転向者の存在や、朝鮮人が様々な形で日本の戦争と植民地支配に組織的に動員されていく過程を全く知らなかったとは考えにくい。仮に詳しく知らなかったとしても、金達寿との交流や彼の文学作品を通じて、朝鮮人の転向問題の重要性の認識に至らなかったと考える方が、状況的に不自然と言わざるを得ない。

では、そのような中野をして、「朝鮮人に転向はないぞ……」と書かせる契機となったものは何なのか。この点に関しても注目されるのは、やはり金達寿である。中野が編集後記を書いた『新日本文学』1958年11月号に、金達寿の「朴達の裁判」が掲載された。「南部朝鮮K」という架空の町を舞台に、朴達という朝鮮人青年が繰り広げる奇妙な政治闘争を描いた、文字どおり「朝鮮人に転向はないぞ……」を体現した小説である[31]。朴達は大地主に仕える無学な作男だったが、朝鮮戦争直前に「北部朝鮮」のパルチザンと間違えられて逮捕され、留置

27
中野重治「『政治と文学』まえがき」(『政治と文学』1952年6月、東方社)。『全集22』194頁。

28
中野重治「金達寿へ」(1959年3月31日付の葉書)。『全集28』419頁。

29
金達寿「中野さんの思い出」(中野重治研究会編『中野重治と私たち』1989年11月、武蔵野書房)218−219頁。

30
廣瀬陽一「在日朝鮮人から見た「転向」の言説空間——金達寿文学における〈親日〉表象を通じて」(坪井秀人編『戦後日本を読みかえる5』2018年7月、臨川書店)を参照。

31
以下、「朴達の裁判」の粗筋は、廣瀬陽一『金達寿とその時代——文学・古代史・国家』(2016年5月、クレイン)143−144頁に基づく。

場に入れられた際、政治・思想犯からハングルをはじめ朝鮮の歴史や文化などを教わったことで、朝鮮の独立と民族解放のために活動するようになった。だが「南部朝鮮」で共産主義運動を行えるはずがなく、直ちに逮捕される。すると彼は泣きわめいてすぐに転向を誓う。しかし釈放されると直ちにビラまきや演説などで「南部朝鮮」の政府やアメリカ軍の批判を再開し、捕まるとまたすぐに転向する。こんなことを際限なく繰り返すため、朴達は獄中の政治・思想犯からは相手にされていないが、町の人々の間では不思議と人気が高く、一種の英雄的存在となっていく。のみならず彼を取り締まるべき警察や検察庁の中にも好意的な者があらわれ、治安検事の金南徹の方が孤立していく。

思想の科学研究会編『共同研究転向』(1959−62年)の中心人物である鶴見俊輔によれば、金達寿はこの小説の単行本を鶴見に送り、「あなたに読んでもらわないと困る」と言ったという[32]。鶴見はこれを自分たちの転向研究に対する重大な批判と受け止め、晩年まで繰り返しこの小説に言及した。このエピソードから明らかなように、1960年頃までに多くの日本人が容易に手に取れる雑誌や新聞に発表された小説やエッセイの中で、朝鮮人の転向、しかも権力への抵抗という転向の在り方を提示したものは、「朴達の裁判」以外になかった。中野はまとまった文章を書いていないが、やはり「朴達の裁判」に大きな衝撃を受けたことは間違いない。それは何より中野が死ぬまでこの小説の「原稿ガラ」を自分の机の引き出しに保管していたことに窺える[33]。中野が『新日本文学』の編集長や事務局長を務めた49−62年に、金達寿は数多くの小説やエッセイを同誌に発表したが、その中で中野が自宅で保管していた金達寿の唯一の原稿が「朴達の裁判」なのだ。中野が編集者に原稿を渡す際、必ず「原稿ガラ」の返却を求めた人物だったことを念頭に置くと、これを単純な返却ミスと済ませることはできないだろう。

さらに、「朴達の裁判」発表からわずか1年半後の1960年4月、「朝鮮人に転向はないぞ……」が現実化されたと見える状況が、韓国で起こった。四月革命である。48年8月の韓国建国時から大統領を務めた李承晩(イスンマン)は、反共を国是とする軍事独裁国家を構築し、反抗的な人々に「アカ」のレッテルを貼って容赦なく弾圧・虐殺した。しかし60年3月に実施された正副大統領選挙の不正ぶりに憤慨した馬山の市民や学生のデモを皮切りに、韓国全土で民衆デモが起こり、4月19日に頂点に達した。これにより、李承晩の軍事独裁体制は崩壊し、韓国の国内外で民主化への期待が大きく高まった。

中野は四月革命後まもなく発表した「私は疑う」連載第1回で、李承晩が「もともと日本帝国と結びついていた男」で、「長く「朝鮮をアメリカ合衆国の委任統治下におこうとして努力」してきた男」だったことを知らなかったと述べ、「こういう男を「愛国者」「韓国の生みの親」とするためにアメリカ政府のやつてきたことは、つまるところ今度あけすけに世界にさらされたわけだつた」と語った[34]。その後、北朝鮮の朝鮮作家同盟など22の「諸政党、社会団体指導者の連席会議で採択された声明」の中の、「いわゆる過渡政権なるものは、李承晩カイライ

32
鶴見俊輔「国民というかたまりに埋めこまれて」(鶴見俊輔・鈴木正・いいだもも『転向再論』2001年4月、平凡社)22頁。

33
「朴達の裁判」の「原稿ガラ」は、中野の死後に原泉が見つけ、封筒に入れて金達寿に送り返した。現在、封筒と「原稿ガラ」は、神奈川近代文学館「金達寿文庫」に保管されている。

34
中野重治「私は疑う—朝鮮と韓国とアメリカと日本」(『新日本文学』1960年6月、新日本文学会)。『全集14』502−504頁。ルビは論者が付した。

政府の延長であり、その再版にすぎない。〔中略〕いわゆる国連監視下の南朝鮮での単独選挙は、これまでのように、わが祖国の分裂を永久化するのみで、南朝鮮人民には飢餓と貧窮、無権利のみをおしつけるであろう」という文章を読み、連載第2回で、「われわれ日本人の朝鮮を見る目には曇りがあるのではないか、その曇りはほとんど民族的なものといつていいほどのものなのではないか。そこに、朝鮮から「韓国」をしらずしらずにも切りはなすようなひどい鈍感があるのではないか」。「朝鮮民主主義人民共和国の、アメリカ軍によつて切りさかれている南半分という現実にたいする胴忘れがあつた」と自己批判した[35]。そして同年8月に金日成（キムイルソン）が提起した「南北連邦制」に賛成し、「私は日本人として、この提議が受け入れられ、一日も早く南北協商のことがはこばれるのを待ちのぞむ」と述べた[36]。なお韓国の民主化時代は1961年5月16日、朴正熙（パクチョンヒ）ら青年将校による軍事クーデターで終わりを迎え、その後、中野が生きている間に第二の四月革命は起こらなかった。とはいえ、在日朝鮮人社会では軍事クーデター後も8月頃まで南北統一を志向する組織的な動きは続いた[37]。「模型境界標」の執筆は7月上旬なので、中野は朝鮮半島の統一が再び遠ざかってしまう直前の雰囲気の中でこの小説を書いたことになる。

こうして中野には、1930年代から朝鮮人の転向に対する知見が蓄積され、その問題性を認識しうる土台が形成されていた。この認識の上に、「朴達の裁判」から受けた衝撃と、この小説が現実化したと見える四月革命によって、中野の生涯でただ一度、韓国の強固な軍事独裁体制が打破された事実が複合的に重なり、「朝鮮人に転向はないぞ……」の文言が「模型境界標」に刻まれたと推定し得る。本論で挙げた数々の傍証は、この推定を様々な角度から補強するものと言える。こうして「模型境界標」は、日本の共産主義運動に対する中野の批判的な眼差しと朝鮮問題に対する中野の新たな認識の両方が、一つのテクストの中に直接に記されている点で、中野文学の中で特異な位置を占める小説なのである。

35
中野重治「私は疑う　二　朝鮮とアイゼンハウアーと天皇と大学生」（『新日本文学』1960年7月、新日本文学会）。『全集14』506–508頁。

36
中野重治「牡丹峰劇場からの声」（『朝鮮総聯』1960年12月5日、在日朝鮮人総聯合会中央本部）。『全集14』574頁。

37
朴慶植『解放後 在日朝鮮人運動史』（1989年3月、三一書房）402–406頁を参照。

4. 終わりに

本論の最初に指摘したように、中野にとって転向や朝鮮の問題がどれほど重要なものであるかは広く知られているにも関わらず、「朝鮮人に転向はないぞ……」に注目した論考はほとんど書かれなかった。それは中野研究の重心が、圧倒的に日本の共産主義運動との関係に置かれてきた結果であるが、中野が、魯迅と違って、（在日）朝鮮人の文学者や運動家の誰についても、まとまった文章を書いていないことにも要因がある。まるで中野が（在日）朝鮮人から学ぶことなく、独力で朝鮮問題に対する認識を深めていったように見えるからだ。しかし、本論で明らかにしたように、中野が金達寿など、（在日）朝鮮人から多くを学んでいたことを示す痕跡は、決して少なくない。

中野は1960年代以降、日本の共産主義運動が朝鮮問題を軽視／無視してきた

ことへの反省を訴えた。それが円谷など多くの人々の目に誠実な態度と映ったのは、中野が金達寿など、（在日）朝鮮人との具体的な交流を通じて得た実感に基づいて発言し行動してきたからではないか。今後、中野の文学活動や政治運動の意義を、朝鮮問題を射程に入れた共産主義運動の再検討を通じて立体的に浮かび上がらせるためには、敗戦後に新たに関係を持った在日朝鮮人との交流まで視野に入れる必要がある。「朝鮮人に転向はないぞ……」は、そうした交流の一端を垣間見せてくれる、貴重な文言である。